

体験話法 (erlebte Rede), その文法的 特徴と Imperfekt の機能

武 田 昌 一

体験話法 (erlebte Rede), その文法的特徴と Imperfekt の機能

Über den gelben Blüten der Iris begann die Luft zu flimmern. *Heiß würde der Tag werden*; er zog die Jacke aus. (F. G. Jünger: Urlaub. 1952)

作中人物 (いわゆる epische Person) の意識の流れを描写する技法としては内的独白 (der innere Monolog) と、体験話法が挙げられる。内的独白では、虚構の人物自身が語り手 (Erzähler) になるのであるが、この手法を小説の構成原理としているものに A. Schnitzler の ‚Leutnant Gustl‘ (1900) がある。ここでは事件に乏しい現実が語り手の意識における反映として描かれているのであって、在来の一人称小説 (Ich-Erzählung) が様々な事象や体験を現実的なものとして物語って行く仕方とは趣を異にしている。古い時代の一人称小説では現実と体験は客観的価値を持つものと信じられていたのであり、主観と現実との距離は存在していたのである。然し独白形式ではそういう距離はもはや消失している、ということが出来る。いわゆる「現実の徹底的な主観化」である。もう一つの持法である ‚erlebte Rede‘ では語り手は登場人物の内部へ身を移して、その人物の視点から語っているのであって、「語り手は存在していて、しかも存在しない」。この二つの手法は W. Kayser によれば独逸では自然主義の時代に発展し、現世紀の20年代に、外国文学殊にフランス文学から改めて学び取られたものだという。

体験話法 ‚erlebte Rede‘ という名称は、erlebt という付加語と Rede との間の論理的関係が不明のままいつの間にか一つの Stilmittel を示すものとして定着してしまったが、今も依然として不満や反対の対象となっていることは、多くの論者が sogenannt 「いわゆる」と前置きする、いわば保留的な態度からもうかがわれる。最初の提唱者である J. E. Lorck の著、„Die erlebte Rede.“ Heidelberg. 1921. は未見であるので、命名の経緯と理由を明らかにすることはできない。誰の Rede か、誰によって (体験) erleben されるのか不明なのである。

‚erlebte Rede‘ という Stilmittel の発達を促した要因は様々であろうが、その一つに語順 (殊に定動詞の位置) があるけれども、そのことについては他の場所で論じたのでここでは触れないことにする。

さて、‚erlebte Rede‘ というのは語り手が作中人物の発言や思考を客観的報告という形式で、Imperfekt Indikativ という時称と3人称を保持しながらも、語り手の視点からではなく、そ

の人物の視点から描写する *Stilmittel* である。(そして *würde*+*Infinitiv* が用いられているときは、これは *Imperfekt* による *Kontext* の中で未来を現わす機能を持つとされる。しかしこれが *modal* な意味を持って、例えば推測を表示することも勿論ある。冒頭の例はこのことを示している。つまり *werde*+*Infinitiv* 或は *wird*+*Infinitiv* の代りをするのである。

また *erlebte Rede* の特徴の一つは「……と言った」、「……と考えた」などという前置きがないことである。間接話法 (*indirekte Rede*) では普通こういう断り書、或は導入部を前か後かに伴っている。

Die Leute in Memphis haben uns gesagt, das käme vor und hätte nichts auf sich.
(Ernst Schnabel: Sie sehen den Marmor nicht.)

……*er sagte* uns, daß Iquique eine große Stadt wäre, viel größer als die unsere hier, aber daß es aus lauter weißen Häusern bestehe,…… Rings um die Stadt gäbe es nur Sand und Wüste, und in der Ferne das Gebirge. Es wüchse nicht viel dort, das käme vom Salpeter.

[Fräulein Elfriede unterbrach ihn und fragte uns, was Salpeter wäre. Da aber keiner sogleich sich meldete, *beantwortete sie* die Frage selbst, Salpeter ist Salz, eine Art Salz. Aber weiter, Panzel!] (ebd.)

登場人物の発言或は意識内容を語り手は断り書き (……*haben gesagt*, *er sagte* uns, *beantwortete sie selbst*) で読者に指示しているということは言うまでもないし、*Konjunktiv* (*das käme vor, eine große Stadt wäre, usw.*) もそういう指標となっている。

次の直接話法の例でも断り書きが挿入されているが、定動詞は *Konjunktiv* から *Indikativ* へ移行している前の例とは違って *Indikativ* のままである。

Ich *werde* nie das tun können, was ich möchte, *dachte er*. Nie *werde* ich so leben können, wie ich *will*. Wenn es gut *geht*, alle sechs Monate zwei Wochen Urlaub; mehr *ist* nicht zu gewinnen,……(F. G. Jünger: Der Urlaub)

ところが次に挙げる例では登場人物の意識内容は断り書をはじめに置いて、*erlebte Rede* に移っているが、*erlebte Rede* であるということは前に挿入されたこの断り書によって理解し易くなっている。

Er suchte wieder nach Aushilfen und hörte den Kuckuck ganz in de Nähe rufen. Nein, *dachte er*, es steht schlecht, schlecht auch mit meinem Urlaub. Ein Wunde müßte geschehen, wenn ich hier zwei Wochen angeln könnte. *Was waren zwei Wochen? Wenig oder viel, es hing nicht von ihm ab.* Mißmutig fuhr er mit der Hand über den Bodon… (ebd.)

„Was waren zwei Wochen? Wenig oder viel, es hing nicht von ihm ab.” は直接話法と間接話法では *Was sind zwei Wochen?……es hängt nicht von mir ab.*” 或は „Was seien zwei Wochen?……es hinge nicht von ihm ab.” と変るであろう。

また導入部が発言、思考、報告等を意味する名詞になっている場合もある。

Er brachte *üble Nachricht*. In die Hütte tretend hatte er den Todgeweihten beim Abendessen am Tisch sitzend vorgefunden, in Hemdsärmeln, mit beiden Backen kauend. Er war wieder völlig gesundet. (Bert Brecht: Der Augsburger Kreidekreis.)

この文例中の „……*hatte* er……*vorgefunden*,” „Er war……*gesundet*. は間接語法では „……*habe* er……*vorgefunden*. Er *sei*……*gesundet*.” と Indikativ から Konjunktiv に転換すべきところである。

さらに、こういう導入部さえ見出されない例も挙げられる。が、これはいわゆる *erlebte Rede* の形態を完全に備えたものである。

Der Prinz wußte: sie strebte den Empfang der Absolution an, die man der königlichen Mätresse seit einigen Jahren verweigerte. *Aber wozu bedurfte sie dieser? War sie nicht die langjährige Verehrerin Voltaires? Was konnte ihr die kirchliche Absolution bedeuten?* (Gertrud von le Fort: Der Turm der Beständigkeit. 1957)

次の一節は Thomas Mann の „*Buddenbrooks*” に見出されるものである (第2部第7章)。

Doktor Grabow lächelte vor sich hin, mit einem nachsichtigen und beinahe etwas schwermütigen Lächeln. *Oh, er würde schon wieder essen, der junge Mann! Er würde leben wie alle Welt.……Nun, Gott befohlen! Er, Friedrich Grabow, war nicht derjenige, welcher die Lebensgewohnheiten aller dieser braven, wohlhabenden und behaglichen Kaufmannsfamilien umstürzen würde.……Nun, Gott befohlen! Er, Friedrich Grabow, war selbst nicht derjenige, der die gefüllten Puter verschmähte. Dieser panierte Schinken mit Schalottensauce heute war delikate gewesen, zum Teufel, und dann, als man schon schwer atmete, der Plettenpudding, Makronen, Himbeeren und Eierschaum, ja, ja.……*

Doktor Grabow の Gedankenbericht はここでとぎれて直接語法に流れ込んで行く。》……
Strenge Diät, wie gesagt,—Frau Konsulin? ein wenig Taube,—ein wenig Franzbrot.……》

今迄の例でもうかがえるように Imperfekt で書かれている Kontext では *erlebte Rede* となっている条りはやはり Imperfekt で表現されているのが普通のことであると見てもよく、またこういう Imperfekt の機能が、読者に与える現前化という問題と絡んで論義の中心点となっているが、作中人物が普遍的な事実を考えたり言ったりしていることもあり、こういうときは Präsens も用いられるのであって、そのことは O. Walzer の指摘する通りである (Oskar Walzel: Das Wortkunstwerk. 1924)。

また実際の日常的用法からずれている、Imperfekt の文脈における時の状況語の異常な用法も *erlebte Rede* の特色であるのは、epische Personen の視点からの叙述という点を考えれば理解することができる。

Vielleicht *morgen* schon begann er seinen Teil der Arbeit. (Otto Ludwig: Zwischen

Himmel und Erde.)

Da unten vor der Stadt liegt das Schützenhaus. Wie sind die Bäume um das Haus größer geworden, seit er von dieser Höhe herab auch ihm den letzten Gruß zugewinkt hatte! (ebd.)

これは何年か経って再び故郷の町に帰って来た主人公が丘の上に立って感慨を新たにしている条りであるが, „morgen“ とはこの主人公の視点に立って始めて言えることである。二番目の例の „da unten“ についても同様であるが, ここでは, erlebte Rede‘ はすぐ作者(語り手)の客観的な叙述に移行している。O. Walgel が erlebte Rede に現在を好んで用いる作家として Baron Alexander Robert の名を挙げ, 次のような人称代名詞の用法を指摘している。

Höhnisch herausfordernd flogen die Blicke der Kürassiere nach dem Saal hinüber: — die Knirpse haben Manschetten *vor ihnen!* sie wagen nicht zu mucksen!

ここでは erlebte Rede を direkte Rede から区別するものは „vor ihnen” の „ihnen” だけであって, direkte Rede であるためには „vor uns” としなければならない。

一般的に言えば, 叙述の時称としての Imperfekt (或は Plusquamperfekt), Verb finifum の3人称, 人称代名詞の3人称(殊に Anrede と Selbstgespräch の場合には明確になる), 未来をあらわす würde+Infinitiv, 現実の話局にあてはまらぬ状況語等がこの特異な表現の形態的特徴であろうが, 作者の客観的叙述と微妙に交錯していることも多く, 決定的な目印とはなり得ぬ場合もある。ある情景の描写が作中人物の立場から行われていながら, そのことを顕在的に示す統辭論的徴標が欠如している表現もある。

Auerbach はその著 „Mimesis“ の中でその一例をあげている。それは Flaubert の「ボヴァリイ夫人」の中にエンマが夫と食事を共にする場面であるが, すべてはエンマの視角から描かれているのであって, 読者はエンマを通じてその情景を見ていることになるのである (E. Auerbach: Mimesis, S. 450)。

2

語り手 (Erzähler) は直ちに作者 (Autor) であるとは限らぬにしても小説の有機的一部となっていることは W. カイザーの言う通りであろう。物語り (Erzählung) は本来過ぎ去った出来事を読者 (或は聞き手) に報告するものであって, 読者は絶えず語り手の声を聞いているのである。客観的現実を伝えようとする19世紀のいわゆる写実主義小説においては多かれ少かれ, 客観的事実を物語り, 作中人物がいかにかえ, 何を言い, 何を感じたかを或距離を置いて伝える語り手の存在を前提としている。しかし, erlebte Rede では語り手は背後に退く。語り手の声が低くなり, 作中人物の声が高まる。„erlebte Rede‘ は「……と言った」, 「……と考えた」或は「彼には……のように思われた」などという前置きによって語り手が物語りの世界に介入したという感じを起させまいとする意図から生れたものでであろう。登場人物がある事象に触発されて, どんな思想や感情を抱き, どのような言葉を口にしたかをつき離して叙述する

のではなく、すべてはその人物の意識における反映としてあらわれて来るのである。作者の透視図による概念的な説明から登場人物の視点に移ることによってその人物自らがひとり読者の前に印象的に浮び上る。その印象性は劇的 (mimetisch) など形容してもよいであろう。舞台上の人物を連想させるからである。物語るという行為と読者との距離が大きくなり、読者と人物とのへだたりはせばまって、人物は直接に読者に語りかけて来る。この視点の転換はよく作中人物に乗り移るといふふうに説明されるのであるが、人物の体験分野からの叙述が行われていながら3人称が保持されていることを考えると、そう言いきってしまってよいものだろうか。直接話法と間接話法の間形の形式とも言われるが、明確で疑念の余地のない定義は下しにくいのである。

Einmal fragte sie ihren Bruder: Was ist er für einer? Sie hatte ihn nur auf dem Sterbebett gesehen und nur abends, beim Schein einer schwachen Kerze. (B. Brecht: Der Augsburger Kreidekreis.) 作者がここで女主人公に完全に乗り移ってしまっているとするれば Sie は Ich に変らなければならないだろう。

ところで „Er erzählte, sein Freund *fahre* im Sommer nach Italien.“ というような間接話法では接続法の動詞, *fahre*‘ によって報告者の存在が感知される。別な言い方をすれば距離のある間接性がそこにはうかがわれる。それは情景や人物や場所を委曲を尽して描き出すというよりは、要約し、本質的なものを簡潔に叙べるのに適した形式であって、客観性を指向するものである。生々とした物語り (Erzählakt) には向かないと言えるであろう。殊に接続法による間接話法が長々と連続するときは煩わしく冗長な感じを惹き起し易い。

3

意識内容を眼の前にあるようにまざまざと描き出す (vergegenwärtigen) のが erlebte Rede の持つ機能の一つであるとされるが、それとそこに用いられる Imperfekt との関係はどのようなであろうか。物語りの「基本的な」、或は「自然な」時称だと言われる Imperfekt は読者をその現在から引きはなして過ぎ去った出来事の世界にひき入れる。かつて存在した人物、場所、生起した事件に読者を感入させる。Perfekt はいつも語り手の現在にひき戻して来る、いわば主観的な (ichbestimmt) 時称であるが、Imperfekt は過去の出来事を現実の過去に属するものとして客観的に、事実忠実に (wirklichkeitstreu) 表示する。いくつかの継起する事象を関連あるものとして叙述する。過ぎ去って行く時の性格に従って様々な事件を繰りひろげる Kontext には最もよく適合するのである。それは事件の経過を具象的に読者に語る。この経過の具象性、事実性が Imperfekt によって際立たせられる。過去を客観的に表現するこの時称によって読者はいくつかの事象をひとつのまとまった流れとして具象的に追体験して行くことができる。Imperfekt は過ぎ去った或る出来事を進展する筋の一部として再現するのに適している。

小説におけるこの Imperfekt について K. ハムブルガーが Vergegenwärtigung と関連さ

せて、その無時称的 (atemporal) な性格に論及している。虚構の世界の Imperfekt は過去の機能を失い、架空の現在を指す。そこに語られていることは非現実的なものであって想像の中にしか存在しないことを告げる働きしか持たないと彼女は説いている。彼女は主として三人称形式の物語り (Er-Erzählung) を対象において論義を進めているが、無時称性という決論は Ich-Origo という稍強引な起点から導き出されているのである。これは語り手、或は現実の話局も考え合せば、一般に報告者 (Referant) が、いま、ここで (Jetzt und Hier) 発言する現在の時点の意味している。話者の立っている時間と空間という座標の軸を現わすものである。現実の報告では現実の Ich-Origo が存在するが、小説においてはその Ich-Origo は架空のものであり、ここを基点として過去の出来事はいわば現在化されて展開するというのである。現実の時間空間の関聯が架空のそれに転換して行く。現実的 Ich-Origo は小説中の人物の架空の Ich-Origines に変る、だから Imperfekt の持つ過去を表示する働きは失われる。この経緯はとりわけ erlebte Rede において観取される。ここでは、架空の人物が不定の時点で感じ考え言ったことをあらわす意味内容だけが重要なのであって、それらは不特定の「いま、ここで」現在化される、だから Imperfekt は atemporal になるのだと説いている。たしかに Imperfekt による叙述における未来の状況語という日常の実際の話局とは異なる現象を理由づけるには atemporal という観方は適切である。しかしシュナイダー (W. Schneider: Stilistische deutsche Grammatik) が指摘するようにハムブルガーは現在 (Gegenwart) と Vergenwärtigung という含蓄の多い概念を深く追及していないと思われる。Imperfekt は事は過ぎ去った時に属しているのだという意識を失わせない。それに Imperfekt が atemporal となるとすれば、いわゆる歴史的現在 historisches Präsens の果す機能との関聯あるいは相違はどう見てよいのだろうか。両者は作者のそれぞれ違った構成意図から生れて来て、異った局面に現われ、異った文体価値を持つ筈である。

語り手は Imperfekt によって終始一定の距離を置いて事件を報告して行くとは限らず、主要人物の傍らに足をとどめて批判、注釈を加へながら読者の方に顔を向けたり或は人物の中に滑り込んでその視角から事象を眺めたり、その人物の語彙を使って口をきいたり、或はまた遠く距ったりする。それは何も新らしいことではない。Jean Paul 以来既にその例は多いのである。しかし叙事詩的傍観者の平静な距離はリアリスティックな作品にあっては大体保たれているのではないか。'erlebte Rede' という技法が使われるのは Epos を演劇化しようとする意図から出ていることは前にも触れたが、この場合語り手は後に退く訳である。この演劇的 (mimisch) ということと、眼前に見る思いを起させる (Vergegenwärtigung) ということに関聯して、ここに A. Döblin の見解を紹介するのは蛇足ではないだろう。「演劇は経過しつつある事象を伝え、叙事詩作家は経過した事象を物語るなどということは正しくない。叙事詩作家が Präsens を使おうと、Perfekt を使おうとそんなことはどうでもよいことであり、全く技術的問題である。叙事詩を読む者にとっては報告される事象はいま経過しているのであり、彼はそれらをいま共に体験するのである。我々は叙事詩的なものにおいて、Dramatiker と丁度同じ

ように物事をいま表現するのであり、それらはまた同様にいま受取られるのである」。

小説という仮構の世界では Imperfekt の働きは多様で柔軟であり、極めて弾力的である。それは作中人物の Ich-Origo に従えばかつてあった事柄を表示することも出来る。また語り手の Erzählakt が行われている Ich-Origo から見れば既に過去に属している事象も必ずしも作中人物相互の Ich-Origines によればそれ以前の過去ではなくともいい場合がある。そういう複雑な時間的関聯さえも読者にとって理解するのに困難ではないというのは、時称そのものによるよりも、一層多く筋や時の状況語や、語り方を通じて針路を与えられるからであろう。シュタンツェルによればこの語り方によって Imperfekt の本来の機能は左右されるのである。

語り手の声が読者の耳にひびいて来るような物語りの局面 (シュタンツェルはこれを auktorial と呼んでいる。19世紀の写実主義的小説には共通した局面であろう) と並んで、語り手が後退している局面 (シュタンツェルによれば, personale Erzälsituation) とが小説には存在する。personal とは登場人物的ということであり、これは szenisch あるいは, mimisch と言いかえてよい。auktoriale Erzählsituation では語り手の現在と語られる出来事が属する時との時間的な距りはそのまま変ることなく読者によって受けとめられる。語り手から見て過ぎ去った事件を表示する Imperfekt (Es war einmal……) という時称は完全にその機能を果す。この局面では, 'erlebte Rede' は現われ得ない。しかし personale Erzählsituation は, 'erlebte Rede' という技法が駆使される局面であって、作者は後退して、物語るという行為から読者の注意をそらせ、人物の行為や発言や意識を直接に、いまそこで進展しているような錯覚を起させ易い。読者が人物の Ich-Origo に従うのに抵抗感を覚えないように仕向けるのである。morgen, heute, gestern というような状況語が, 'erlebte Rede' において Imperfekt と結びつくのは一つは直接話法からの転換であるが、こういう場合 Imperfekt の文法的機能は neutral 化するとも言えることができる。物語る行為も、語られている事象は過去に属するのだということを暗示する要素も読者には明確には意識されない。だからそこに語られていることは今ここで進展している思いをするのだとシュタンツェルは言っている。物語りの Imperfekt はやはり、いまそこにあると感じられたことを既に過去のものとして示す働きを持っている。カイザーは「語り手は二つの時間系列の中に生きている」と言う。「登場人物の時間系列と、彼が物語る出来事の現時のそれとの中に」。だから „……Flugzeug, das ihn nach Kanada morgen bringen sollte.“ の „morgen“ は登場人物の時間系列から言えば正しいのであり、更に語り手は物語るという不特定の現在に生きている。その時点からすればすべては過ぎ去ったことなのである。読者はそれぞれの時間系列に順応させられることになる。

'erlebte Rede' は20年代以降の小説で大きな比重を持っているが、それは一定の距離を保って事象を眺め物語る、のぞ眼鏡を間においた、いわゆる、'allwissend' という作家の姿勢の喪失が生んだ傾向なのであろうか。

Literatur

W. Kayser: Entstehung und Krise des modernen Romans. 2. Aufl. 1954.

Fritz Martini: Das Wagnis der Sprache. 3. Aufl. 1958.

R. Brinkmann: Wirklichkeit und Illusion. 1957.

W. Schneider: Stilistische deutsche Grammatik. 1957.

H. Weber: Das Tempussystem des Deutschen und Französischen. 1954.

Käte Hamburger: Die Logik der Dichtung. 1957.

O. Walzel: Das Wortkunstwerk. 1926.

G. O. Curme: A Grammar of German Language.

E. Auerbach: Mimesis. 2. Aufl. 1959.

Franz Stanzel: Episches Praeteritum, erlebte Rede, historisches Praesens. DVjS (1960).

* E. Lorck: Die „Erlebte Rede.“ Eine sprachliche Untersuchung. 1921. は京都府立医科大学教授原俊彦氏の御好意で一読することができた。Redewiedergabe は三つの仕方がある事を述べ、„erlebt” とは聞手が „聞いた” という意味だと言っている。また私が引用した Buddenbrooks の中の同じ一節を挙げている。